

# M I G A コ ラ ム

## 「世界診断」

2013年7月26日

岡部直明

明治大学国際総合研究所フェロー  
日本経済新聞客員コラムニスト



1969年早稲田大学政経学部卒。同年、日本経済新聞入社、経済部記者等を経て、ブリュッセル特派員、ニューヨーク支局長、取締役論説主幹、専務執行役員主幹、コラムニスト等を歴任。2012年より現職。主な著書に「主役なき世界」、「日本経済入門」、「応酬一円ドルの政治力学」など。

### されど高まるEUの求心力

危機に見舞われているはずの欧州連合（EU）に、この7月1日、新たにクロアチアが加盟した。民族対立、国家の分裂という苦難の道を歩んできた旧ユーゴスラビア諸国のなかから、スロベニアに続く2番目の加盟国である。これでEUは28カ国に拡大した。さらに、2014年1月にはバルト3国のひとつラトビアが18番目のユーロ加盟国になることも決まった。こうしたEU、ユーロの拡大について経済格差を残したままでは、危機の芽を広げかねないという警戒論もある。しかし、この経済格差が発展の原動力になったのも事実である。構造的な矛盾を抱えながらも一歩前に踏み出すEUには、いまなお求心力が働いている。

### チトーを生んだ国

クロアチアには2つの顔がある。内陸部はボスニア・ヘルツェゴビナとの長い国境線が続く。一方、西側はアドリア海に面した美しい観光地である。とりわけ、ブリオニ諸島は景勝の地として知られる。

第2次大戦後、ユーゴを統一したヨシップ・ブロズ・チトーの別荘はここにあった。OBサミット取材の合間に、この別荘を訪ねたことがある。様々な国際会議の舞台になった豪華な大広間とは対照的な狭い部屋をのぞく。そこには、機械工だったチトーが手にした多くの工具が残されていた。チトーは大統領になったあとも、時折、この部屋にこもり、機械いじりにふけたという。反ナチスの闘士として、ユーゴ統一に立ち上がったチトーの原点はここにあった。

民族を超えた国家統一という偉業はしかし、永遠には続かなかった。1980年、チトーの死後、絆はほどけ国家分裂の時代が始まる。民族間の憎しみ合いは過去にさかのぼり、憎悪の連鎖は断ち切れなくなる。

チトーの葬儀には、世界から首脳が集まり、活発な首脳外交が展開された。それはユーゴ統一を成し遂げた指導者への敬意とともに、チトーなきあとの混迷の時代を予感させるものでもあった。

### 音楽の絆

チトーの死後、混迷を通り越して危機の時代に突入した旧ユーゴ諸国だが、そこには人々の心をつなぎ合わせる「音楽の絆」があった。チトーが亡くなった1980年、クロアチアには、ある天才クラシックギタリストが産声をあげる。その類まれな音楽性と美貌で、いま世界で最も注目されているアナ・ビドビッチである。

バッハなど古典、タルレガなどスペインもの、そしてバリオスなど中南米の音楽と、すべての分野で人々に大きな感動を与えている。舞台と聴衆が一体になる深遠な音楽はどこからきているのか。そこには美しさを超えた鮮烈さがある。なぜあの混乱のクロアチアで天才は育ったのか。あるいは、クロアチアに生まれ育ったからこそ、鮮烈な音楽が与えられたのだろうか。いま米国に住み、演奏旅行で世界を飛び回るビドビッチだが、クロアチアが生んだ大作家、詩人のミロ斯拉ブ・クレザの本は手放さないという。

そのビドビッチが5歳のとき手にした最初の楽器は、兄が使っていた日本の名器、河野賢のギターだったという。不思議な縁を感じざるをえない。

混乱と対立の旧ユーゴ諸国を音楽で結びつけたのは、ひとりの日本人だった。指揮者の柳沢寿男氏だ。混乱のなかで、コソボフィルハーモニー交響楽団の首席指揮者に就き、さらに2007年、民族共栄をめざしてバルカン室内管弦楽団を設立し、音楽監督になった。音楽を通じて、戦場での架け橋を担った日本人に世界から称賛が集まった。

その演奏は、決して世界の一流交響楽団のような洗練されたものではないが、柳沢氏の熱心な指導で民族を超えて楽団員たちの心がしだいに通じ合ってくる。その響きは、ビドビッチのギターと同様に、鮮烈である。そうした柳沢氏の戦いを映した映像記録（BSジャパン＝放送文化賞受賞）は、何度みても感動的である。

どの民族にも利害関係をもたない日本人だったからこそ、バルカンの民族融和に大きな役割を果たせた面があるかもしれない。そこにはグローバル社会で果たせる日本人の可能性が潜んでいる。大きな危険を冒しながら戦場での架け橋を担った音楽家がいたことは日本の誇りである。

## バルカン安定に歴史的役割

「バルカン半島と欧州にとって、歴史的だ」。クロアチアのEU加盟にあたり式典に参加したファンロンパイE

U大統領はこう語った。第1次世界大戦の引き金を引いたサラエボ事件から2014年は100年になる。20世紀末のユーゴ紛争にいたるまで、バルカン半島はまさに「欧州の火薬庫」だった。それだけに、バルカン半島の安定につながるクロアチアのEU加盟の意義は大きい。

クロアチアに続いて、セルビアがEUとの加盟交渉を認められたのにも注目したい。EUに加わることができれば、地政学的意味はクロアチア以上に大きい。民族紛争を乗り越えて、EUという共通の土俵に集うことになれば、平和の連合であるEUの歴史的役割が果たせることになる。これはこれまでの量的なEU拡大を超えた質的統合ということもできるだろう。

もちろん、クロアチアがEUに定着し、さらにユーロに参加するようになるには、克服すべき課題が多い。観光ビジネスを活性化するのは近道だが、それに依存するだけではいずれ経済は立ちゆかなくなる。ギリシャの二の舞いを演じる恐れもある。本格的な経済活性化には、外資の誘致など経済構造改革に取り組む必要があるだろう。製造業の基盤はあり、EUのインフラ支援などをてこにして、新興国並みの経済発展を遂げる可能性を秘めている。

クロアチアのEU加盟は一見、大欧州への激動のなかでは小さな一歩に見えるが、サラエボ事件100年を踏まえれば、バルカン安定はまさに歴史的变化である。それこそ、2度の世界大戦を経て実現した欧州統合の原点といえる。

